

普通科高校のキャリア教育における グループ・アプローチの活用

山 本 幸 代

1. 問題と目的

近年、7割以上の高校生が在籍する普通科高校のキャリア教育に対して、批判や課題の指摘が相次いでいる。そこで、高校生の学校から社会への円滑な移行を援助する方法を探ることを目的として研究を行った。キャリア教育で育成すべき力の中でも最も重要と考えられる人と関わる力を育成するために、人間関係の相互作用を利用して体験から学ぶグループ・アプローチを用いた講座を行い、その効果を検証した。

2. 方法

いわゆる「進路多様校」である大阪府立 A 高校の生徒たちを研究協力者として、2つの研究を行った。研究1は、2年生の就職希望者と進路希望未定者を対象に全5回の講座を実施し、キャリアデザイン力尺度（三川ら、2013）を用いて講座前後の変化を検討した。研究2は、3年生の就職内定生徒を対象に全3回の講座を実施し、キャリアデザイン力尺度と KiSS-18（菊池、1988）を用いて講座前後の変化を検討した。

3. 結果と考察

研究1は出席者が少なかったため、統計的な処理はできなかった。しかし、全5回の講座に出席した生徒については進路意識の変化や、キャリアデザイン力の伸びなどが認められた。

研究2では、全3回に出席した21名を分析対象として対応のあるt検定を行ったところ、KiSS-18は有意傾向を示すにとどまったが、キャリアデザイン力尺度については下位尺度すべてで有意差が認められ、講座を受講したことでキャリアデザイン力が高まった可能性が示唆された。さらに、キャリアデザイン力の講座前後での差が生まれた要因について検討するため、合計得点の増加量によって生徒を3群に分け、高群と低群を比較検討した。t検定の結果、講座前には両群の間に差はなかったが、講座後は下位尺度すべてにおいて有意差が確認され、講座を受講したことで差が生まれた可能性が示唆された。振り返り用紙の記述内容を検討したところ、高群では活動を成功体験と受け止めている者が多かったのに対して、低群ではネガティブな受けとめ方をしている者が目立った。

4. 今後の課題

研究1は、参加者が少なかったことが大きな課題である。講座そのものは高校生にとって意義のある取り組みであるが、学校での実施には制約も多く、実施時期や方法、講座の内容等をさらに検討していきたい。研究2では一定の成果は確認できたが、シェアリングの持ち方や講座の内容を検討していくことで高群と低群の差を埋める取り組みを進めたい。また、すべての生徒を対象にしたキャリア教育のあり方についても研究を進めていきたい。